

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	ノルウェー語から見た日本語の条件表現 : 日本語を学習しようとするノルウェー人を対象に
Author(s)	Solvang, Harry
Citation	ニダバ , 28 : 108 - 117
Issue Date	1999-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00048051
Right	
Relation	



ノルウェー語から見た日本語の条件表現

— 日本語を学習しようとする
ノルウェー人を対象に —

Harry SOLVANG

1. はじめに

日本語を外国で外国語として又は日本で第二言語として学ぼうとする学習者が増えるにつれて、日本語文法研究が様々な角度から盛んに論じられているようになった。その重要課題の一つとして大きな関心をもたれているのは日本語条件表現、つまり「ト、タラ、バ、ナラ」で接続している前件と後件に関わる問題である。Alfonso (1966)、久野 (1973)、井上 (1979、1983)、Hinds, Tawa (1976)、正宗 (1979)、豊田 (1979、1983)、田中 (1987)、田 (1989)、水谷 (1990)、前田 (1991) などの先行研究から明らかになったことの一つに、条件文の前件と後件が「ト、タラ、バ、ナラ」の四つの条件接続助詞によって非常に制限された形で結びつかれているということがある。これら条件を表わす四つの形式の間には、微妙な意味の違いがあるばかりでなく、それぞれに異なった文末とのモダリティ制約があり、日本語学習者にとって習得しにくい文法項目と考えられている。

筆者の母国であるノルウェーにおいては、日本語との比較・対照研究は浅く、特に条件表現に関する研究は全く行われていない。そこで、本論文では、ノルウェー語母語話者を対象にして、日本語の条件表現は実際に学習の困難を起すのかという問題点に焦点をあて論じることとする。その際、日本語の条件表現をモダリティ制約の観点から絞って、考察することにし、ノルウェー語を母語とする学習者が日本語の条件表現を学習する場合、習得上どのような困難が起きるか、また、なぜそれが困難であるかについて、日本語の条件文と第一言語であるノルウェー語の条件文のモダリティ制約を比較して、論じてみたい。

2. 研究の進め方

a) 日本語条件表現をモダリティ制約という観点から扱っている文献を参考にして、条件接続助詞「ト、タラ、バ、ナラ」のどれかを前件に用いるかによって、後件の文末モダリティがどのように制限されているかということをも基本的把握する。その際、主に田 (1989) と前田 (1991) でなされた研究を参考にすることにした。

b) ノルウェー語と日本語における条件表現を比較・対照する上で、第二言語習得理論に

基づいて、ノルウェー人の学習者の日本語の条件表現を学習する上での困難な点を予測する。

c) 参考にした文献で得た資料に基づいて、条件表現の用法上の問題を含む質問表を作成する。

d) 質問表を用いて、ノルウェーの大学で日本語を勉強しているノルウェー人の学生を対象にして、言語調査を実施する。同じ言語調査は日本人にも実施し、その回答をノルウェー人からの回答との比較群とする。

e) 調査の結果を分析する。これは、第二言語習得理論によって予測された学習困難な点が現れるかどうかを確認する以外にも、日本語を学習しているノルウェー人には、実際にどのような学習上の困難が起こるかという点を具体的に明らかにすることにもなると考えられる。

3.1 「ト、タラ、バ、ナラ」の成立とモダリティ制約

本論文では、まずモダリティを「遂行モダリティ」と「述べ立てモダリティ」に分けたのである。「遂行モダリティ」というのは、話し手が聞き手に何らかの行為を要求したり、話し手が自分の行為を拘束するなどの遂行を伴っているということである。命令、誘いかけ、依頼、禁止、忠告、意志、希望、決意などを表わす文はそこに所属している文である。一方、遂行を伴わない発話は「述べ立てモダリティ」と呼ぶことにした。このカテゴリーに入っているのは話し手はある事実を客観的に描写したり、又はある事柄について解説・判断したりする発話である。

次に、この分類に基づいて、「ト、タラ、バ、ナラ」それぞれの条件接続助詞と後件に表わされるモダリティを考察してみよう。以下、「ト、タラ、バ、ナラ」の順でまとめる。

3.1.1 「ト」

「ト」が成立する場合は、後件が必ず述べ立てモダリティの場合であり、後件が遂行モダリティであれば、不適格となる。すなわち、

- (1)*ビールを飲むと、タクシーで帰ってください。(遂行)
- (2)*ニューヨークに行くと、近代美術館が見たい。(遂行)

のような文は成立しない。

3. 1. 2 「タラ」

「タラ」で前件と後件が接続される場合、「タラ」と共起する後件の文末表現には何も制約はない。従って、以下の(3)、(4)のような述ベ立てモダリティを含んでいる文も遂行モダリティを含んでいる文も成立する。

(3)まだ回復していなかったら、こんどの試合に出ないだろう。(述ベ立て)

(4)お疲れでなかったら、いらっしゃってください。(遂行)

3. 1. 3 「バ」

「バ」は前件の述語が動作性を表わす場合と、前件の述語が状態性を表わす場合では、後件における制約が異なるので、別々に扱う必要がある。なお、本論文では、前者を「動作性+バ」、後者を「状態性+バ」として区別する。

「動作性+バ」が成立するのは、後件が必ず述ベ立てモダリティ場合であり、後件が遂行モダリティであれば、不適格文となる。従って、

(5)*京都に行けば、お土産をたくさん買おうと思います。(遂行)

(6)*駅に着けば、電話してくれない?(遂行)

のような文は非文法的な文となる。

「状態性+バ」の場合、後件にモダリティ制約を受けないので、遂行モダリティ文、述ベ立てモダリティ文のどちらも適格文となる。つまり、以下の(7)、(8)のような文は問題なく成立する。

(7)時間があれば、うちによってください。(遂行)

(8)社長が来なければ、君が挨拶をしろ。(遂行)

3. 1. 4 「ナラ」

「ナラ」条件文には、ただ一つを除いて、モダリティ制約はほとんどない。成立しない文としては、既定条件を表わす文である。つまり、

(9)*さっき教室に行ってみるなら、誰もいなかった。(述ベ立て)

のような描写文は成立し得ない。

以上から、「ト、タラ、バ、ナラ」と後件のモダリティ制約の関係を図示すると、
 <表1>のようになる。条件接続助詞が許容される場合は○の記号を付けて、そうでない
 場合×を付ける。

<表1> 「ト、タラ、バ、ナラ」と文末モダリティ対応

モダリティ		ト	タラ	状態性+バ	動作性+バ	ナラ
述べ立て	描写	○	○	○	○	×
	判断	○	○	○	○	○
遂行	意志	×	○	○	×	○
	希望	×	○	○	×	○
	依頼	×	○	○	×	○
	忠告	×	○	○	×	○
	命令	×	○	○	×	○

4. 習得上の問題点と仮説

ノルウェー語の条件文には、前件で用いる接続詞(註1)と後件に対する文末表現でのモダリティ制約は存在していない(註2)。その反面、セクション3.で述べたように、日本語条件文はモダリティ制約を受けているので、ノルウェー語を母語とする学習者が日本語の条件表現を学習する際には、日本語とノルウェー語の条件表現に対するモダリティ制約の差異が学習の困難を及ぼすのではないかと考えられる。日本語で成立し得るモダリティ領域はノルウェー語の領域より狭いので、ノルウェー人の学習者は日本語の条件表現を学習する場合、その中間言語の領域をノルウェー語の領域にまで拡大する可能性があるのではないと思われる。そこで、ノルウェー語を母語とする学習者を対象に次のような仮説を立てて、モダリティ制約の習得について調査した。

(1)ノルウェー語を母語とする学習者には、「ト」と「動作性+バ」で条件表現が成立しないモダリティ領域は誤用を起こしやすいところではないだろうか。

(2)述べ立てモダリティと遂行モダリティの両領域で成立可能であり、ノルウェー語の条件表現とも領域を共有する日本語の条件表現「状態性+バ」、「タラ」、「ナラ」の習得は容易であろう。

5. 言語調査

5.1 被験者

筆者は「ト、タラ、バ、ナラ」のモダリティ制約に基づいて、質問表を作成した。そして、その質問表を用いて、ノルウェーの大学で日本語を中級レベルで勉強している15名のノルウェー人を対象にして、言語調査を実施した(注3)。日本語を母語とする15名の日本人にも同じ質問表を用い、その回答をノルウェー人からの回答と比較した。

5.2 質問表の作成

調査文の形式としては、前件を固定して、後件に様々な述べ立てモダリティと遂行モダリティを含んでいる文末、つまりモダリティの種類異なる文を接続したものである。そして、調査文を「ト」条件文、「タラ」条件文、「動作性+バ」条件文、「状態性+バ」条件文と「ナラ」条件文に分けて、それぞれのモダリティ制約の領域別に調査した。

5.3 調査表と結果

以上のようなモダリティを後件に含む調査文をノルウェー人と日本人の被験者に提示し、文の正否が識別できるかを○×法により調査した。各調査文の適格性・不適格性を判断する際、先行研究に基づいてまとめた「ト、タラ、バ、ナラ」条件文のモダリティ制約を参考にした。調査文の正答は()内以示され、×は不適格文、○は成立する文を示す。次に、日本人とノルウェー人の被験者による各調査文ごとの回答および支持率についてまとめた。右欄の数字は正答と誤答をした日本人とノルウェー人の被験者それぞれの人数および支持率(%)を示している。

	日本人			ノルウェー人		
	正答	誤答	支持率	正答	誤答	支持率
1. A: そのCDはずっと歌しかったんだ。						
B: そんなに歌しければ (○) 持って帰ってもいいですよ。	15	0	100	8	7	53.3
(○) 持っていけ。	15	0	100	4	11	26.7
(○) 買ってください。	13	2	86.7	10	5	66.7
(○) 貸してあげますよ。	13	2	86.7	14	1	93.3
(○) あげよう。	15	0	100	11	4	73.3

	日本人			ノルウェー人		
	正答	誤答	支持率	正答	誤答	支持率
2. A: 鈴木さん、よくイタリアへ行きますね。						
B: ええ、こんど行くと (X) オペラを見に行きたい。	12	3	80	7	8	46.7
(X) 一緒に付いて行ってくれないか?	14	1	93.3	10	5	66.7
(O) 十回目になりますよ。	15	0	100	12	3	80
(X) 友達にお土産を買おうと思います。	13	2	86.7	8	7	53.3
(X) 一人で行くことにする。	14	1	93.3	11	4	73.3
3. A: 私は新しいカメラを買いたいんですが。						
B: 新しいカメラを買うのなら (O) 駅前のカメラ屋さんがいいですよ。	15	0	100	13	2	86.7
(X) 値段が高いそうです。	14	1	93.3	8	7	53.3
(O) 高い店もあれば安い店もあるから、よく調べてください。	15	0	100	12	3	80
(O) 古いのを貸してもらいたい。	13	2	86.7	11	4	73.3
(O) 私も買うことにする。	13	2	86.7	10	5	66.7

以後省略

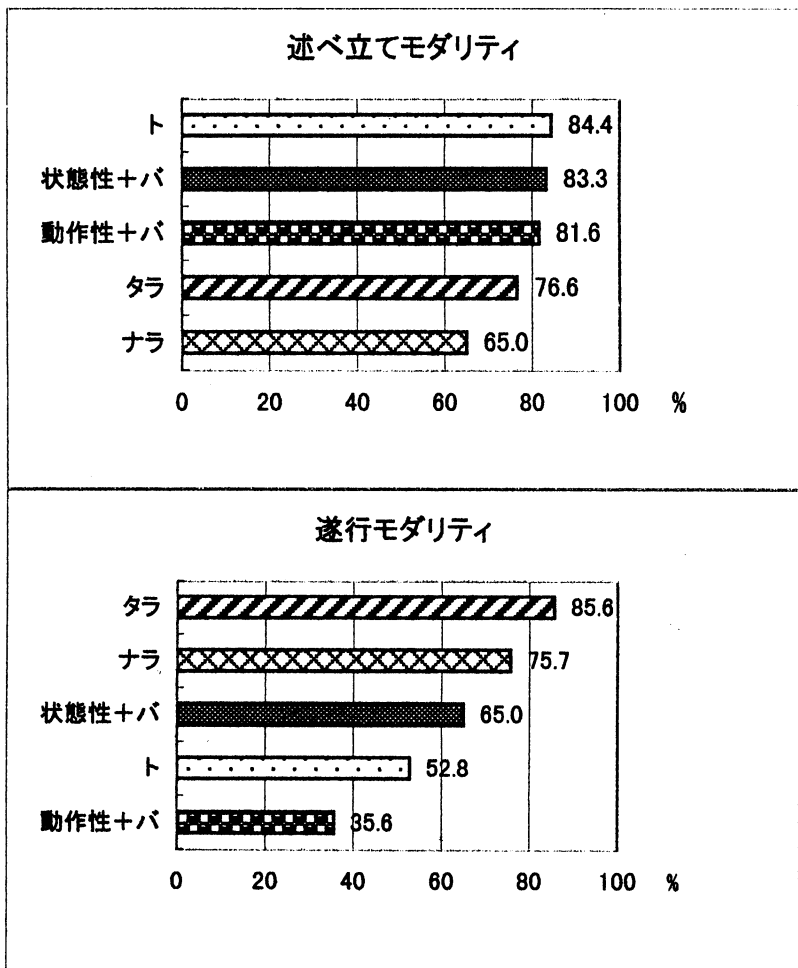
6. 考察

ここで、ノルウェー人の回答を中心に、「ト、タラ、動作性+バ、状態性+バ、ナラ」それぞれのモダリティ領域別の支持率を考察する。その際、調査文を条件接続助詞ごとに、述べ立てモダリティと遂行モダリティ領域別に整理し、モダリティ領域別の平均支持率をまとめた。

	述べたてモダリティ	遂行モダリティ
「ト」	84.4	52.8
「タラ」	76.6	85.6
「動作性+バ」	81.6	35.6
「状態性+バ」	83.3	65.0
「ナラ」	65.0	75.7

以上の結果を次の棒グラフに示す。

〈表1〉「ノルウェー人のモダリティ領域別の支持率」



そして、その結果明らかになった点を条件接続助詞ごとに、正答支持率の低いものから列挙すると、ノルウェー人の日本語における条件表現の学習難易度が分かる。

述べて立てモダリティ

1. 「ナラ」 65.0
2. 「タラ」 76.6
3. 「動作性+バ」 81.6
4. 「状態性+バ」 83.3
5. 「ト」 84.4

遂行モダリティ

1. 「動作性+バ」 35.6
2. 「ト」 52.8
3. 「状態性+バ」 65.0
4. 「ナラ」 75.7
5. 「タラ」 85.6

この「日本語条件表現と文末モダリティ制約」についての言語調査から明らかになったことを下にまとめる。

a) 述べ立てモダリティ領域に所属している条件表現はノルウェー人の学習者に高度な学習困難を起こさないということが分かる。日本語とノルウェー語の条件文が共通に成立する領域に属する項目「タラ、動作性+バ、状態性+バ、ト」は比較的学習が容易であるようだが、学習者に困難を招く項目としては「ナラ」のようである。被験者の回答をみると、「ナラ+描写文」と「ナラ+判断文」を誤って、成立し得る文として認める傾向があることが分かる。これが、日本語とノルウェー語で成立領域に差異があるからであるのではないかと思われる。

b) 遂行モダリティ領域から考察すれば、まずモダリティ制約を何も受けない「タラ」と「ナラ」条件表現の場合、特別の学習困難は認められないことが分かる。一方、遂行モダリティ領域で成立制約を受けている「ト」と「動作性+バ」の条件文の適格性・不適格性を判断しようとする場合には、ノルウェー人の学習者は窮してしまうようである。なぜならば、日本語とノルウェー語の条件接続詞が成立する領域が重ならない部分であるからである(註4)。

要するに、ノルウェー人の学習者はノルウェー語のモダリティ領域を日本語にも適用し、日本語におけるモダリティ制約の許容可能領域外へその領域を拡大しているのではないかと考えられる。

7. 結論

本論文では、ノルウェー語を母語とするノルウェー人の学習者が日本語の条件表現を学習する際、どのような学習上の困難が起こるかということ、モダリティ制約の観点から記述しようと試みてきた。言語調査の結果から、日本語とノルウェー語の条件接続詞の成立領域の差異が、ノルウェー人の学習者の日本語条件表現の習得に関与していることが明らかになった。つまり、セクション4.で、ノルウェー人の学習者が日本語の条件表現を学習しようとする場合に起きる困難点から立てた筆者の仮説には妥当性があるのではないかと述べておきたい。

8. おわりにー日本語教育への応用

本論文において、ノルウェー人の学習者が日本語の条件表現のモダリティ制約のどのような点が理解しにくく、どのような点が誤用を引き起こしやすいかを具体的に示すことができたように思う。例えば、次のような点は日本語教授法において役立てることができるものと考えられる。すなわち、モダリティ制約については、後件に「述べ立てモダリティ」が現れる文と接続可能な条件接続助詞と、後件に「遂行モダリティ」が現れる文と接続可

能な条件接続助詞を区別しなければならないという制約を適格に学習者に導入すれば、学習者の誤用を防ぐのに役立つのではないかと考えられる。このようなことも含めて、本論文をスタートとして、実際の日本語教育の場において、指導項目の配列や教材の作成や日本語学習者の学習難易度に応じた教授法などに応用するためにさらに研究をすすめようと思う。

注

1) ノルウェー語において条件文で表わされる概念を簡略化して次に示す：

①話し手がある事柄に関するある程度の知識あるいは確信を持っている場合、前件と後件を *når* という接続詞で接続する。言い換えれば、話し手が *når* を使う場合は前件の意味内容に実現性がある。*når* は英語の *when* に対応している語であると言えよう。

接続詞 主語 動詞 動詞 主語

例：Når han kommer, går jeg.

時間 彼 来る 帰る 僕

彼が来たら、僕は帰る。

上記の例文が述べて得るのは、「彼」が絶対に来ることである。

②話し手がある事柄に関する知識あるいは確信が欠如している場合、これを主に「*dersom, hvis, såfremt, ifall, om, så sant*」という六つの条件接続詞のどれかで表わす。つまり、話し手が、前件の事柄が実際に成立するか否かを判断できない場合、それを「*dersom, hvis...*」で示すことである。「*dersom, hvis, ...*」は英語の *if* に対応している語であると言えよう。

条件

例：Hvis han kommer, går jeg.

彼が来るのなら、僕は帰る。

この場合、「彼」が来るかどうかははっきり分からないことが述べられている

2) 筆者は (Solvang, 1998) ノルウェー語における条件を表わす接続詞、つまり「*dersom, hvis, såfremt, ifall, om, så sant*」と後件の文末モダリティの関係を考察し、モダリティ制約は全く存在していないということを指摘した。

3) ノルウェー人の被験者はノルウェーのオスロ大学又はベルゲン大学で2年間日本語を受講している者を対象とした。

4) 「状態性+バ」条件文が比較的低い支持率を得た (65%) が、この結果については本論文での仮説によって説明されないものである。この結果については将来の研究課題とした。

参考文献：

- 井上和子 (1979) 'On conditional connectives' 『日本語の基本構造に関する理論
の実証的研究』文部省科学研究費特定研究報告
- 井上和子編 (1983) 『日本語の基本構造』三省堂
- 久野、 (1973) 『日本語文法研究』大修館書店
- Solvang, Harry (1998) 『ノルウェー語から見た日本語の条件表現』広島大学大
学院文学研究科言語学専攻、修士論文
- 田中俊子 (1987) 「もしピアノを弾けたならー条件表現ナラとモダリティ」
『東北大学日本語教育研論集』
- 田仁淑 (1989) 「条件文を伴う複文」
『東京外国語大学日本語科年報』11
- 豊田豊子 (1979) 「接続助詞「と」の用法と機能(3)」
『日本語学校論集』6
- 豊田豊子 (1983) 「接続助詞「と」の用法と機能(4)」
『日本語学校論集』9
- 仁田義雄 (1989) 『日本語のモダリティ』くろしお出版
- 前田直子 (1991a) 「『論理文』の体系性ー条件文・理由文・逆条件文をめぐってー」
『日本学報』10
- 前田直子 (1991b) 「条件文分類ー考察」
『東京外国語大学日本語学科年報』13
- 正宗峰子 (1979) 'A study of tara, ba, to, nara in Japanese'
『日本語の基本構造に関する理論的実証的研究』
文部省科学研究費特定研究報告
- 水谷信子 (1990) 「接続表現と談話の展開ー条件表現を中心にぎてー」
『日本語シンポジウム「言語理論と日本語教育の相互活性化」』
- Akatsuka, Noriko (1983) 'Conditionals and the Epistemic scale.
' Language, 61
- Alfonso, Anthony (1966), Japanese language patterns: A structural
approach, vol. 2, Sophia University Press, Tokyo
- Ellis, Rod (1985), Understanding second language acquisition,
Oxford University Press
- Hinds, John and Wako, Tawa (1975-76), 'Conditions on conditionals in
Japanese', Papers in Japanese Linguistics, vol. 14
- Odlin, Terence (1989), Language transfer, Cambridge